井上光晴新作品集

井上光晴新作品集

5

勁草書房

井上光晴新作品集　5

1971年3月25日　第1版第1刷発行
1979年1月25日　第1版第2刷発行

©著者　井上光晴

発行者　井村寿二

発行所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2—23—15
電話　(03) 814—6861
振替　東京 5—175253

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。　図書印刷・和田製本
＊定価は外函に表示してあります。
＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。
0393—882210—1836

目次

黒い森林 3
カリーニン橋の下で 173
気温一〇度 183
不可能な情熱 211
空想より科学へ 239
象のいないサーカス 262
残虐な抱擁 281
解題 373
階級の文学 羽山英作 376

井上光晴新作品集

5

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

黒い森林

1

ブーブリクが一〇七番のバスに乗った時、他に乗客は四人しかいなかった。ひとりは青いくすんだオーバーを着た娘、ほかに年輩の女二人と、連れの子供が、運転室を背にしたシートに並んで坐っていた。揃って鼻の長い似通った顔つきをしている女たちは親類か姉妹でもあるらしく、休む間もない口調でしゃべりつづけていたが、五カペイカ貨をボックスへ入れて切符を切取った後、彼はきくともなくその話し声をきいた。

「あの人たちは今までがよすぎたのよ。百も二百もとれる内職が二年もつづいていたんだからね」

「百ルーブルっていうのは本当？」

「嘘なものかね。シゥラ自身がそういっていたんだからね。それもみんな勤務先から亭主のくすねてくる細々したものがなければできない仕事だよ」

「でもねえ、百っていうのは少ない金じゃないよ」

「毎月百五十にはなるって、シゥラは鼻高々だったわ。内職が百五十も入るんなら、天井だって張り替えられるわねって、いつかいってやったことがあるけど」

女たちの声はそこで急に低くなり、紙袋につっこむ子供の手の音だけががさがさときこえるようになった。髪毛の黒い、上唇のまくれ上った少年は時折彼の方をちらと見上げながら、砂糖揚げのピーナツをたべていたが、それは彼がモスクワに戻ってきて、いちばんはじめに買ったたべものだ。百グラム、二十八カペイカ。彼が一ルーブルの購入伝票をだすと、そんな金額では半端になるから売れない、と肥った丸顔の女店員はつっぱねた。どうして、三百五十グラムでちょうど一ルーブルじゃないか。二カペイカの損を計算に入れた上で彼が秤の数字を指さすと、女店員はものもいわずかたわらのピーナツを菓子スコップで掬い上げた。しかし本当のことをいえば、計算のことなどどうでもよかったのだ。もしこのずっしりと重い紙袋が年に一個ずつでもいい、小包として到着したらあそこは楽園と化していただろう。彼は砂糖揚げピーナツ三百五十グラムをそれまでいた場所でたべることを想像しながら、初めの一粒をなかなか口にすることができなかった。

彼は不意に目の前に十五カペイカ貨を差しだされたので、びっくりして顔をあげた。

「五カペイカにしてくれないかね」

彼はポケットを探ったが、五カペイカ貨はなかった。

「持ってない」ブーブリクはさっきの停留所で乗ってきたらしい若い男にこたえた。
「いっそロハにすればいいんだよ、なあ、おっさん」
「どうかな」彼はいった。若い男の不遠慮な言葉に反撥して。
「そうじゃないか。バス代をロハにしたってパンみたいに家畜にくれてやるわけにはいかないから、必要でもないのに乗りだめする奴はいないよ」
若い男は誰かの受売りらしい理屈をいって笑ったが、ブーブリクはちっともおかしくなかった。
「君は学生かね」ブーブリクはきいた。
「卒業したよ、もう」皮襟の半外套を着た青年は鼻で返事をした。
どこかに勤めているのかね。しかし彼はその言葉をひっこめた。こういう口のきき方をする青年は前にはいなかった。レーニンの肖像と宇宙での勝利を背景にしたスローガンのでている停留所で、はねるような足どりをしながら青年は下りた。
「あんなストーリイなんてないわ。あれはみんな作りものよ」
「なぜ作りものだというの」
「赤軍の密偵の額に拳銃をつきつけて、目ばたきしなければ許してやるなんて、そんな反革命軍の将校なんていないはずだわ。あの映画は全体に感傷的すぎるのよ」
「わたしはそうは思わないわ」
「あのシーンはあれでいいのよ。だって仕方がないでしょ。あの将校の中には密偵を助けたい気持も働いているんだから……」
どやどやと乗込んできた女子学生たちの声を背後にして、彼は降車口のステップを踏んだ。

受付の婦人に教えられた部屋のドアをノックすると、声がしたので彼は中に入って行った。
「ミハイル・イワーノヴィッチ・ブーブリクさんですね。どうぞお坐り下さい」真新しい机をはさんで正面に坐っている男が、人なつこい微笑を浮かべた。
こんどはうまくいくかもしれない。これまであまりに誤解が多すぎたのだ。彼はそう思いながらスマートなベークライト製の椅子に坐った。
「二、三のことを質問させて下さい」前においた書類の一枚をめくりながら人事課長はいった。「あなたがモスクワに帰られてから……」
「モスクワになんですか？」彼はきき返した。
「あなたがモスクワに帰られてからのことですよ。ちょうど一年経っていますが、その間あなたは何をしていたのですか」人事課長の声は低かった。
「姉の家に寄宿しています。亡くなった妻の姉です。二年ほど就職の申込みをしたのですが、失敗しました」ブーブ

リクはこたえた。
「それはどこですか。あなたが申込んだという職場ですよ」
「学校と、それからもうひとつは印刷所関係の仕事です」
「あなたはなぜ就職することに失敗したのですか」
「わかりません」
「あなたの見解をきいているのです」
「もう年ですから、たぶん使いものにならないと思ったのでしょう」
そんなことはない、というふうに人事課長は肩をすくめた。しかし微笑を消すようなことはしなかった。
「あなたは作家ですね」
「ええ、以前は」
「いまはもう書かないのですか」
ブーブリクは曖昧に頭を振った。
「なぜ書かないのですか」
「まだ新しい生活に……」彼は途中で言葉を変えた。「モスクワの生活にまだ慣れませんし、時代はものすごい速度で進んでいますから、とても追いつけません。刺戟が強すぎます」
「刺戟が強すぎますか」人事課長はブーブリクの言葉を耳ではなく舌の先で受けとめるように呟いた。「モスクワも大分変ったでしょう」
「ええ、驚きました」彼は人事課長の柔和な表情に誘い込まれるようにこたえた。
「正確にいうと、ブーブリクさんはモスクワを何年離れていたんですか」
「十一年、いや十二年になります。……」
「するとモスクワを去られたのは一九五二年ですね」人事課長は複雑な顔をした。スターリンが死亡する一年前にそんな事態になったのはめぐり合わせがわるい、とでもいうような。
モスクワを去られた。そういういい方ならそれでもよい。モスクワを去ってわたしはシベリヤに送られたのだ。
「ええ」と、彼はこたえた。
正面の男はしばらく何もいわなかった。それでもまだ作りつけたような微笑は人事課長の顔に貼りついていたが、ブーブリクの背中を突然何か悪寒に似たものが走った。
「ブーブリクさん」人事課長はよびかけるような声をだした。
「はい」
「まわりくどいことや思わせぶりは、お互いの損ですから率直にいわせてもらいますが、あなたの経歴のなかである個所が問題になっています。……」
確かに率直だ、とブーブリクは思った。
「一九五六年、たくさんの人たちがモスクワに帰ってきた時、あなたはその基準の中に入ることができなかった。……」

「ええ」彼はうなずいた。うなずかなくてもよかったのだが、なんとなく習慣のようなものが働いたのだ。
「一九五八年、釈放される二度目の機会にもあなたは選から洩れた。その理由はあなたも知っていますね」
そう、こんどはあそこの中で書いた日記をみつかっていた。日記の一節は今でもはっきり記憶している。〈もしフルシチョフのいう通りだとすれば、彼と彼のいう戦闘的な党はその間何をしていたのか。フルシチョフは党とソヴェート人民を汚辱と頽廃にまみれさせた悪の根源を、スターリン唯一人に求めているが、果してそうか。フルシチョフのいうように、もし党が一貫して民衆の利益を守り、民衆の経験に富む指導者となり、労働者階級に権力をもたらし、偉大なる歴史的勝利のために、つねに最先頭に立っていたとすれば、スターリンはどうしてその上に自分をおくことができたのだろうか。スターリンの在世中、なぜその戦闘的な党を指導する政治局員、或は中央委員の間からスターリンを倒さねばならぬという言葉は生れなかったのか。……〉
フルシチョフの秘密演説をお前は誰から入手したのか、ときかれて、知らぬ間に夜半、誰かが寝床の中に突込んでいたとこたえたことも、五八年の選から外される大きな理由になった。あそこでは誰もが読んでおり、どこからか廻ってきたというのも事実だったのに。
「知っています」ブーブリクはいった。
「現在、この点についてあなたは釈明できますか」
「釈明？……日記についてですか」
人事課長ははっきりした視線をブーブリクにむけた。
「あなたの事件は法律的にはすべて解決しています。あなたは自分の過去の経歴について、何も拘束される必要はありません。ただわたしが率直にききたいのは、現在も個人崇拝の思想について、以前のような見解を持っておられるかどうか、それをききたいのです」
「以前のような見解といいますと……」彼は口ごもった。フルシチョフの報告を日記で批判したことか、それとも……。
「個人崇拝の思想について批判することに、あなたは現在でも反対の立場をとりますか」
人事課長がブーブリクの混乱を整理してくれた。
「反対ではありません。スターリンの誤りについては誰よりも強く弾劾したいと思っています。ただ……」
「つづけて下さい」
「ただそれだけでよいのかという問題……スターリンの問題はわれわれ自身の問題でもあるというふうに理解しないと……そう考えています」どこまで話すべきか、判断しかねて、彼の言葉はうまくつながらなかった。
「もう少し具体的に話して下さい。あなたはわれわれ自身の問題だといわれますが、それはどういうことですか」
「スターリンだけを批判してみても問題は解決しない。

……いや、スターリンの誤りはそれとして徹底的に批判すべきですが、同時に、わたし達自身の内部にあるスターリン主義とも容赦のない闘争を行うべきだ、それがわたしの考えです」ブーブリクはいった。どうしてだか、さっきから耳のつけ根のところが痛がゆい。

「スターリン時代に活動した者はみんな同罪だといわれるわけですね」できるだけ口調を柔かくするような態度で、人事課長はいった。

「そういうわけではありません。……」ブーブリクは次の言葉を探した。「誤解されると困るのですが、スターリンを批判するためには自分のことをぬきにしては批判できないと……そう考えているのです。共犯者とかいうことではなくて……」

「共犯者といわれましたね」

「同罪という意味で使ったのです。スターリン時代に活動した者はみんな同罪だと、いまあなたがそんなふうにとられたので、それは誤解だといっているのです。わたしは問題をそうは理解していません。……」

「わかり易くいって下さい。複雑ないい廻しをなさる必要はありませんよ。わたしはあなたの言葉をできるだけ理解しようとしていますが、あまりむずかしい表現をされるとわかりにくくなりますから」

ブーブリクは耳のつけ根を掻いた。そして「どうも口下手なもので」とあやまった。

「お互い率直にいきましょう」人事課長はまた口もとを柔かくした。

「ええ」ブーブリクはうなずいた。人事課長は率直という言葉が好きなのだ。

「あなたはスターリン批判を認めますか」

「ええ、もちろん」彼は強い声でこたえた。何かむなしいものを感じながら。

「しかし、あなたはスターリン時代に指導者だった者には、スターリンと同じ責任があると考えられるわけですね。そうでしょう」

「意味は少し違いますが……そういってもかまいません。指導者だった者だけに責任があるというのではなくて、党全体、ソヴェート人民全体の問題として考えたいのです」

「党全体、ソヴェート人民全体に責任があると考えられるのですか」

「責任があるといってはいません。自分の問題として考えなければスターリン批判を前にすすめることはできないといっているのです」

「また複雑になりましたね」人事課長はいった。「責任があるとはいっていない。しかし問題として考えたいと、あなたはいわれる。同じことではありませんか。……スターリン批判を党全体、ソヴェート人民全体の問題として考えたいと、いまあなたは言明された。それでわたしが責任があるのかときくと、そうじゃないといわれる。どちらが本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当なのですか」
「責任という言葉をあまり使いたくなかったのでそういったのですが、そういう意味でなら、党全体、ソヴェート人民全体に責任があるといってもよいと思います」
「現在もですか」
「は？……」
「よくわかりました」人事課長はそのことについての問答をそれで打切るようにいった。現在もですか、という質問はそのままに残して。

2

約束の時間はすでに三十分余りもすぎていたが、ナターシャは姿をみせなかった。サファノフは手に持ったゴム風船をようやくうとましく思いはじめていた。彼とさしむかいの長椅子には中尉の肩章をつけた将校とその妻らしい女が坐っていたが、どういうわけか、むっつりと黙りこんでいて、どちらからも一度も話しかけようとしない。
きっとこれからあまり希望しない任地におもむくのだ。でも中尉にしては老けているなと思いながら、サファノフは立上って待合室の階段のところまで歩いた。窓際の椅子に坐っている風船売りの学生が彼を見て、ウインクした。三十分ほど前、彼はその学生から風船を買ったのだ。ナターシャのおどろく顔を想像しながら。別に子供連れによびかけるのでもなく、五本あまりのゴム風船を空中に浮かせながら慢然と二階待合室に坐っている学生をみて、まさか売物とは思わず、サファノフは「その風船はどこで買いましたか」ときいたのだった。「いいえ買ったのではありません。売っています」と学生はこたえたので、サファノフはつい吹きだして一本買ってしまったのである。
ナターシャはまだあらわれない。彼は階段を下りキエーフスカヤ駅の表口にでて、そこにいる小さい子供の手に風船を握らせた。どうもありがとうという母親の声がしたが、彼は振りむかず、右手を上げてそれにこたえた。すると、腰をかがめた老婆がせかせかした足どりで近づいてきて、モスクワ大学の寄宿舎に行くにはどのバスに乗ればよいかとたずねた。彼は老婆を一一九番の乗車場に案内し、地下鉄の出口の所まで戻ってきた時、背中に襞の入っているグリーンのオーバーをみつけた。
「ナターシャ」
「パーヴェル、どうしてこんな所に立っているの」ナターシャはびっくりした表情をして振りむいた。
「どうしてって、待合室じゃ三十分も待ったんだ。少し頭を冷やそうと思ってね」
「すみません。出がけに叔母がきたものだから」
「それで？……」サファノフは生唾をのみこんだ。
「ここじゃ話せないわ」
「待合室に戻ろうか」
「そうね……」

「昼ごはんたべた？」
「朝から何もたべていないわ。でも欲しくないから」
　こんな場所に何をぼやっと立っているんだ、というように、レザーのジャンパーを着た男が早足で二人の間を突き抜けて行った。
「いけないな、そんなんじゃ」サファノフはナターシャの顔色をうかがうようにしてみた。
「とにかく何処かに坐りましょう」
「たべなくていいのかい、何も」サファノフはいった。
「ココアかお茶か飲むわ」
「待合室にあるよ。確かココアも売ってたはずだ」
　ナターシャは歩きだした。あまりかんばしい結果じゃないな。彼は栗色の髪をみながらそう思った。
　駅のホームから上る二階待合室の階段を上ると、風船売りの学生が風船はどうしたのか、というようなしぐさをした。
「さっき風船を買ったんだ。君にあげようと思って」
「そう」ナターシャは気乗り薄にいった。
「あんな所に落ちついていて、あれで風船を売ってるんだよ」
「ココア、たのんでくれない」
「よし、わかった」彼はつとめて快活な声をだした。
　だが、待合室の隅にある軽食堂にはココアは売っていなかった。
「ココアはないそうだ」
「そう、じゃなんでもいいわ」
「何ができる」彼はひどく不機嫌そうな顔をしている女にきいた。
「何もできませんよ。お茶とそこにでているものだけです」
「じゃお茶を二つ」
「十カペイカです」
　彼が女からお茶を受取った時、集団旅行者らしい一群がどやどやと繰込んできた。
「これじゃ話せないわね」ナターシャは眉をしかめた。
「仕方がないさ。誰も僕たちのことなんか気にしないよ」彼はいった。
　彼女はお茶の中に入れた角砂糖をやる気のないような手つきで突き崩した。
「それで、うまくいきそうかい」
「駄目。うまくいかないわ。少くともポーリャの線は見込みなしよ」
「でもポーリャは自分じゃ……」
「医者が変っているから駄目だっていうのよ。そんなことよりどうして結婚しないの、何の障害もないじゃないかって、いわれたわ」
「ポーリャがそういったのか」
「ええ」

「彼女も大人になったもんだな」
「そんないい方、あまり好きじゃないわ」ナターシャは目を伏せた。
「すまない」彼はいった。「心配しているんだ、それで……」
「体のことはなんとかなると思うわ。それよりあたしが話したいのは別のことよ」
「別のこと」
ナターシャは青白い顔をあげた。
「なんだい、別のことって」
「あなたはやっぱり来年モスクワを出て行くつもり？」
「それはこの前話しあって……」
「話しはしたけど、何も解決していないわ。あたしの単位のことだって」
「たった一年待つだけじゃないか。僕は辛抱して君がくるのを待ってるよ」
「そのことを話しあいたいのよ」
「一年も離れているのは辛抱できないっていうのかい」
「あなたにずっとモスクワに居てほしいのよ」
「そんなことできない相談じゃないか」
「なぜ」
「なぜって、君はわかっているはずじゃないか。はじめからそれはちゃんと君にもいってあるはずだぜ」
「でも条件が変ったわ」ナターシャはいった。「以前と今とじゃお互いの考え方だって成長しているし……」
「僕は何も変っていないよ」サファノフはいった。「シベリヤ行きは僕の念願だからね」
「でもお父さんがシベリヤにおられるとは限らないでしょう」
「僕がシベリヤに行くのは、父のことだけじゃないよ」
集団旅行者のうちのひとりが「ここには馬鈴薯は売っていませんよ」と頓狂な声をあげ、自分たちだけにわかる冗談に人々はげらげらと笑いこけた。
「じゃなんのために。まさか開発の英雄になるためじゃないでしょう」
「ナターシャ」
「わるかったわ」彼女は額の髪を手で払った。
「父のことを確かめたいのは事実だ。まさか生きているとは考えられないけど、いまのままじゃあんまり母が可哀想だからね。しかし僕がシベリヤに行きたいのは、そればかりじゃない。新しい人間たちのいる土地で、僕は自分の勉強をしたいんだよ」
モスクワに新しい人間はいないの。しかし彼女は違うことをいった。
「シベリヤの空気を吸いたいのなら、いくらでも旅行すればいいと思うわ。モスクワに生活の根拠をおいて、それで……」
「モスクワに僕の目指すものはないよ」サファノフは彼女の言葉をみなまできかなかった。

「前からそういおうと思っていたけど」ナターシャは低いが芯の通った声でいった。「シベリヤにさえ行けば新しい感覚と思想がごろごろしていると思うのはあまり実際的じゃないわ」

大きいトランクを持った男の肘がサファノフの坐っている椅子に触れた。

「君と今日、こんな話をしようとは思わなかったな」彼はいった。

「どっちみちはっきりしなければならないことよ」彼女はいった。

「それでどうなんだい」

「何が」彼女は目ばたきした。

「君の本当の気持は、方針を変えてモスクワにずっと残りたいというわけか」

ナターシャは握りしめた拳を口もとに持っていった。

「要するに僕と一緒に生活したくないんだな」

「そんなふうにいうの」

「だってそうだろう。僕はシベリヤ行きを取消さないよ。君はモスクワにいたいというし、そうなれば……」

「じゃ、あたしがきくわ」ナターシャは薄い唇をぴしっと閉じるような口調でいった。「子供をなぜいま生んではいけないの」

「しかし、それは……」

「結婚していないからというんでしょう。しかしあなたさえよければ明日にだって結婚できるわ。あたしの家族は誰も反対していないのだから」

「シベリヤで僕は何もかも新しくやり直したいんだよ。そのために子供は早すぎるんだ。この前、君も承知してくれたじゃないか」

「シベリヤで何をやり直すの」ナターシャはいった。

「モスクワでの生活はもう飽々してるんだ。何の意味も価値もない。泥沼みたいな学生生活とはきれいさっぱりお別れして、シベリヤで人生を生き直したいんだよ、君と一緒に」

「あたしはつけ足しじゃないの」

「何をいう」

「それでどうするつもり」

「僕がききたいよ、それは」

「あたしはこの頃、あなたのことが何もわからなくなる時があるわ」彼女は呟くようにいった。

「こんな生活、犬にでも喰われてしまえと思っているんだ」

「あたしがそんなに嫌」

「君じゃない、僕自身のことさ」

「どうしてそんなに自分をはずかしめるの。何にも顔むけならないことはしていないのになぜそんな気持になるのか。前はそうじゃなかったわ」

集団旅行者たちの喚声がまた高くなった。

「おい、ヴァーシカ、ちょっとここにきてみろよ」「ウォツカは駄目だってさあ。あのおばちゃんに怒鳴られるぞ」
「これはウォツカじゃないよ。飲み薬だよ」「なんの飲み薬だい。胃腸かそれとも頭痛か」「ほら頭痛の薬を一杯」
「ヴァーシカ、こいってばさ」
「あんた達、それ以上騒ぐと巡査を呼ぶよ」
「おれたちは騒いでなんかいないよ。モスクワと別れるのを悲しんでいるんだよ」壁際のテーブルに坐っているひげ男が女に声を返した。
「そうだ。おれたちは騒いでなんかいないぞ。悲しい酒盛りをしているんだ」ヴァーシカという名前をしきりによんでいる男がいった。
「あたしはみたことをみんな証明できるよ」カウンターのむこうから女は指をつきつけた。
「出ようか」サファノフはいった。
「別の所でもいいから今の話のけじめをつけたいわ」
「変だな今日は」
「あたしはいつまでも中途半端な気持でいたくないのよ」
ナターシャは椅子をずらして立上った。
風船売りの学生はまだ同じ場所に坐っていたが、今度は彼をみてもにこりともしなかった。
「何処に行こうか」サファノフは靴にくっついた泥雪の塊をはねとばした。二日前、例年よりも早い初雪が降ったので、陽のあたらぬ場所はじめじめしているのだ。
「地下鉄で行きましょう」彼女はいった。
「ちょっと電話をかけてくる。用事を思いだしたんだ」
ナターシャは声をださずにうなずいた。そして道路を横ぎって彼が公衆電話のボックスに入るのを、後を追いながらじいっとみつめていた。
「もしもし、あ、エレーナ。僕です。わかりますか。どうしても今日会いたいんです。ええ、どうしても。ええ、都合がわるいのは知ってますが、三十分でもいいんです。ええ、じゃ四時に、いつもの所で……」
サファノフは大股で彼女の方に近づいてきた。ナターシャはいつも上体を動かさないようなその足どりが好きだったが、なぜか素直な気持ではみれなかった。
「あと一時間しか君と一緒におれないよ。今日、アーストロフさんの家によばれているのを忘れていたんだ。どうせくだらない仕事をたのまれるだろうけどね」
「そう」彼女はいった。

3

「そこ空いていますか」
「どうぞ」ブーブリクは並外れて背の低い男に隣の椅子をすすめた。
「ありがとう」背の低い男は自分で運んできたアルミニウムの盆から牛乳とソーセージの入った皿をテーブルに移し、それから盆を返しに行った。

「アントーヌイチは馬だよ」

「鼠を捕る馬か」

ブーブリクのまむかいに坐っている色の黒い男がはじめにいって、ブーブリクの隣の男が応じたのだ。二人はくすくすと笑った。ブーブリクはトマトジュースのコップを手にとり、人事課長とかわした言葉を反芻していたが、そこから何も希望的な観測をひきだすことはできなかった。あなたにむくような適当なポストがあればよいのですがね。その時はこちらからご連絡します。人事課長は別れ際にそういったが、「その時」はまずやってこないだろう。

背の低い男が戻ってきて、「妙な天候ですね。また降りだしましたよ」とブーブリクに声をかけてきた。

「そうですか」ブーブリクはいった。

「雪ですか」

「いや、雨です」背の低い男は「鼠を捕る馬か」といった男にこたえた。

「こりゃチャンピオンの試合ということになるな、今年の冬は」

「なんですか」背の低い男が「アントーヌイチは馬だよ」といった男にきいた。

「早々に雪とか雨とか、トレーニングをやっているから、今年の冬は本格的な寒さになるだろうということさ」ブーブリクのまむかいに坐っている男が自分の洒落を解説した。

「はあ」背の低い男はそう感心もしないような声をだした。片方の顳顬から目尻にかけて青い痣ができている。

「どうです。その豌豆はうまいですか」ブーブリクの左隣の男が背の低い男に不遠慮なことをたずねた。

「まあ普通ですね」フォークで突き刺した豌豆をソーセージの皿から起こすような手つきをして背の低い男はいった。

「おれは豌豆という奴をもう半年もたべていないな」

「豌豆もたべられないくらい忙しいというわけか」

馬鹿馬鹿しい会話をつづけられるものだ、とブーブリクは思った。洒落にもなっていない。

「先週わたしはリビンスクに行ったんですよ」背の低い男は誰にともなく話しかけた。「あの町には実にたくさんの後家さんがいるんですね。女はみんな後家さんのような気がしましたよ」

冗談をいいだしたにしては、生真面目な顔つきをしている。何をいいだすつもりか。ブーブリクはコップの縁を口に触れた。

「女という女が後家さんとはいいな」

「リビンスクというのはそんな町かね」

二人の男が話をうけた。

「わたしはこんなに小さい男なのではじめ遠慮していたんですがね。何処に行っても離してくれないんですよ。前かけの中に入れるにはちょうど手頃だというわけでしょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com